

講演

「これからを生きる子どもたちへ」 津守眞氏からのメッセージ

第六回 お茶の水女子大学ECCCEL子ども学シンポジウム（二〇二二年十月）から

語り手 津守眞

聞き手 高橋洋代（立教女学院短期大学名誉教授）

構成／菊地知子（本誌編集委員）

誰もが堂々と生きられるための方途を求めて

高橋洋代 今日のパネルは「これからを生きる子どもたちへ」ですが、子どもたちがここにいるわけではないので、この会場にもたくさんおいでになっている子どもを育てている方々へお伝えになりたいことをお話しになるといふことだと思っております。

先生は長く愛育養護学校で障碍の子どもたちとかわかれ、今もかわっていらっしやいます。そうして知ったことの中にとっても大事なことがあると思われていると聞きました。

津守眞 そもそも障碍を持つとか、持たないとか、それは一体どういうことか。私は今、子どもの後にくっついて歩きながら、自分自身が障碍を持つようになったということを身をもって感じています。

また、僕は銀行にも郵便局にも行かれませんが、そんな難しいことは僕にはできないから、とてもいろいろなことについて、妻の房江にはとても負担をかけています。

銀行にも郵便局にも行かれない人間が、どうやって社会生活をするか。ちよつと立ち止まってその身になってみれば、たちまちわかつてくるでしょう。

今は不便な時代ですよ。証明書やら何やらがいろいろ無ければ社会生活ができない時代。そういうところで字が書けないだけじゃない、話ができない、おしゃべりができない、それから計算ができない、そういう人がどうやって生きていけるか。しかも、ほそぼそと生きるのではなくて、何か堂々と生きていくことができるやり方がね、あるんだと思うのです。それを見つけないということが、これからのいわば障害児教育の大きな課題だと思います。

養護学校の先生、あるいは障害を持つ子どもの学校の先生は、そんなことぐらい誰でもわかっているだろう、自明のことだと言われるかもしれないけれど、それは自明ではない。普通に字を書いたり何かしている人間が見逃している、そして偉そうなことを自分はわかっているような気がしている。けれど実は子どもほどにわかっているのです。

このことは、お茶大で私の同僚だった田口先生がね、時々それに深く触れることを言っておられました。元々は整形外科のお医者さんで、児童学科の先

生をしていた。そして、フルブライト教授で来られたデール・B・ハリス先生が、そのことを高く評価していました。

高橋 先生は脳出血でお倒れになって、そして今日こうしてお話ししてくださるほどによく回復なさったと思うのですが、お倒れになってから新たに生きてきた世界というのはおありですか。

津守 私はこうしてあなたに導かれて、こうやっておしゃべりすればね、ぺらぺらおしゃべりが出るのですけれど、途中でそれが止まるとね、もうどこからどういふふうにならぬ。いつたらいいかわからなくなる。それが、いわば障り障りということの一つのポイントじゃないかと思うのですね。

世の中には障り障りを持つ人はとてもたくさんいるわけで、その人たちも優れた力をいっぱい持っている。持っているのに、それは人からは認められず、人にもわからず、





▲津守 眞氏

過ごしてしまふ。障碍を持つた人も、みんなが気楽におしゃべりや表現ができるような雰囲気も必要なのですよね。そういう世の中を

どうやってつくっていくか。世の中というのと、ちょっと大げさ過ぎるのですけど、そういう環境をどうやってつくっていくかというのね、実は障碍児教育だけではなくて、むしろ一般教育の中で、これから非常に大事にし、また、開発していかなければならないことではないかと、私はこのごろつくづくとそのことを思っています。多分、僕の生きている間には、それはほんのちよつとしか進まないでしょうけど、それから後の時代、次の時代に向かつてね、これはきつと思ひもよらない具合に展開していくに違いないと僕は思ひます。

幼児期の記憶と現在へのつながり

高橋 人間の根っこを育てる時期である幼児期のこ

とで、何かご記憶に残っていらつしやるエピソードがありますか。

津守 私には祖父がいましたね、私の祖父ですから、もう本当に昔々ですが、その祖父と一緒に、ナメクジが井戸の縁に這^はっているのを、ずいぶん時間をかけてじつと見ていた。それが私の一番古い記憶の一つです。

高橋 そうですか。何かやはり津守先生らしいな。それから、先生は行列する、並ぶ、みんな一緒に歩く、円になって並ぶなど、そういうのがお嫌いだったそうですね。

津守 そうというのは、もう根っから自分が受け付けないの。三歳の時、僕、三年保育なのですよ。そんな昔にね、三年保育の子どもなんて珍しかったのです。でも、その三年保育の中でね、そうやってみんなが輪になって歩くと、僕はもうどっちがどっちだかわからなくなつてしまつてね、いつも迷子になつて。

高橋 それもすごく先生らしい。



▲高橋洋代氏

先生のエピソードをお聞きしていると、やはりじつと観察するとか、ナメクジが子どもに変わっても(笑)。みんなと一緒に行動をすることがお嫌いだというのは、本当に先生の一生の生き方を、ある意味では象徴していると思います。

先生は、これが正しいと選択される場合に一八〇度ばつと転換されるという姿が、ご本の中にありました。先生のお父さまは戦争中に通信機の仕事をしていたらして、それが軍にも使われていたという事で責任を感じられて、すべてのお仕事を五十代の時にお辞めになり、聖書を読む毎日をお過ごしになつたという事で、そういうお父さまの決断は、先生の生涯に影響を与えましたか。

津守 そうですね。それはありますね。非常にあります。私の父の決める時の潔さと確かさというのは、私は実にありがたかったと思っています。私がこう

いう子どもの仕事、しかも障碍を持つ子どもの仕事に就くという時に、私の父はね、それをとても励ましてくれました。そして、心の中ではね、何かがあれば自分はすべてをなげうって助けたいと、そう思っていたらしいと、後になってからわかりましてね、親というのは本当にありがたいということをつくづくと考えました。

それは私だけではない、ここにいる皆さんがそうだと思うのですよね。父親、母親から受けたそういう貴重な財産を、みんなそれぞれがしっかりと持っているに違いない。今この、われわれの若い時代にはなかったほどの大変な時代に、その文化的財産を確かにしながら、幼いころから積み重ねてきたわれわれ日本人の思いをね、どうやって健やかに育てていくかというのが、今の日本の当面している大きな課題でしょう。

現代の課題と保育者の知恵や力

津守 今、当面している日本の課題。それはもう大

きな大きなことで、人の顔色を見ないで、自分でしつかりと考えて判断し、決めていく、そういう力を養っていかなければならない。しかし一体、今の幼児や児童、子どもたちは、どうやって身につけていくことができるでしょうか。本当に毎日、新聞を見て、テレビを見るたびに、何だか恐ろしくなるようなことがいっぱいであることは、ここの皆さん、感じておられるのではないのでしょうか。それをどうやって引き留めて、引き留めて、そして、今の時代をまともにつくっていくのかということ。その課題に向かつてね、今日、こんなに大勢おられるから、本当にそれが積み重なって、今はよくわからないけれども、日本の、また世界の力になっていくのだろうと思います。

高橋 このたびE.U.がノーベル平和賞を授与されました。戦争が頻繁に起こっていたヨーロッパで、互いの国々の大変な努力の末に、国境を越えた集団ができ、賞が贈られたことを、私は非常にすごいことだと思ふのです。日本は今、隣国との間に島の問題

を抱えています。日本が東南アジアや中国、韓国の人たちに対して行った理不尽な行為に対して、どのくらい誠実に謝ってきたかということを考えて、本当にこれから日本が払わなければいけない努力が無限にあるように思います。

津守 そうですね。本当にそうです。そのことを考えると、「現代」の責任というのは大きいですね。今、少年であり、少女であり、そして小さい子どもであり、また、成長しつつある、やや大きくなった子どもたち、この子どもたちに対して、何か私どもは大変申し訳ない思いであると同時に、何か今からでも改めることは改めて、そして、思い切って何かをやる時なのではないでしょうか。

僕は政治のことにはあまり口は差し挟まないことにしているけれど、しかし、少しでも恐ろしさを減らしていくために、私どもが引き留めていくことがあるのではないか。それをこれからもやっていきたい。私はこんな年寄りですけれども、年寄りなりに、年寄りだなんて言っていないで、その上にあぐらを

かいていないで、むしろ若々しく、そこをこれから挑戦してやっていきたい。それは私自身の、現在、毎日思っている課題です。

高橋 本当に重い課題ですが、保育をする者として避けて通れないことですね。先生の本から、先生が一貫してお変わりにならない、縦軸がまったくぶれないことがわかる。でも、横軸で見ると、子どもを前にした時、また、留学生活の中でも、非常に柔軟に、自分の過ちをちよつと反省して、また困って、また気を取り直して、という横のぶれがたくさんあるのです。それでも、やはり縦の線を一貫して持つていらつしやる。その中心には、津守先生の場合は、キリスト教の信仰がおりになるように思います。そういった、人間として持つているものが、やはり保育者の子どもの見方や子どもへのかかわり方などとながつているのでしょうか。

津守 人間として、まともに生きていくのにどうするか。これはキリスト教だからどうかとか、仏教だから、浄土真宗だから、あるいは何宗だからどうか

なんて、そういうことを超えて、これからの日本が世界に対して貢献していく道ではないかと思えます。それを超えてね。これには、まだあと何百年か何千年かかかるのかもしれないけれど、それだけの時間をかけて、子どもがこれから本当の良い道をつくっていく。本当に長い長い時間をかけないとできないけれども、でも、誰かがちよつとずつちよつとずつそれを積み重ねていく、その大きな力になるのは、やっぱり保育者だと思うのです。でも、保育者なら誰でもいいかという、必ずしもそうは言えない。保育者というのは、いつも子どもに触れて、子どもと一緒に考えて、そこから知恵を与えられて生きていく人間です。これからまだ私も、みんな年を取っていきます。でも、年を取っていくけれども、同時に何かそこで本式の、本当の道に立ち戻っていくのにどうするかという、そういう力も同時に与えられてあるのではないかと思えます。

注 『私が保育学を志した頃』ななみ書房 二〇一二年